

グレゴリ夫人と文芸サロン ——情報・教育・活動の領域

(平成29年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)



メディアコミュニケーション学部
情報文化学科
海老澤 邦江 教授

科学研究費補助金(学術研究助成基金助成金)が
交付された研究を紹介します。

グレゴリ夫人(Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932)は、アイルランド近現代の文学・文化的基盤の構築のために生涯を捧げたアングロアイリッシュ系の最後の貴族です。彼女のまわりに集った人物は、詩人・劇作家のWBイエイツ、劇作家JMシンゲやGBジョウ、ジェイムス・ジョイスを初め、当時の才能あふれる文人・教養人が名を連ね、これに比肩できる例は他に見当たりません。独特の皮肉を飛ばすことでも有名な劇作家ジョージ・バーナード・ショウでさえも「現存する最も偉大なアイルランド女性」と称賛する女性です。本人がゲール語を解し、劇作家である一方で、社会的にも現在の国民劇場アベイ座とヒュー・レイン現代美術館創設の原動力ともなりました。

19世紀後半以降、英国からの独立を目指す動きが活発化します。国土面における物理的独立だけでなく、精神的独立を目指していました。つまり、英国による長い統治の間に、アイルランド固有の文化はほとんど打ち捨てられた状況にあり、瀕死状態にあったと言っても過言ではありません。言語・芸術の掘り起しと復活が求められたのです。特に、ICTの現代に置き換えると、文学は世界に発信できる知的な手段であると同時に、その国の知性と品格を表す指標でもありました。アイルランドの独立運動は、文化的後進から先進国への仲間入りを目指し、20世紀前半の文芸復興運動の大きなうねりとなります。その中心に存在していたのが、グレゴリ夫人でした。

これまでの先行研究においては、イエイツやグレゴリ夫人を中心とした文芸復興運動の研究は十分な蓄積があります。しかし、グレゴリ夫人に限ってみると、現代アイルランドの文化的基盤を構築したという活動面には十分な注視が注がれていますが、彼女自身が著した著作については、さらに検討の余地が残されていると考えられます。日本に、彼女の作品の一部は紹介されていますが、イエイツに劇作に大きな影響を与えたと言われながらも具体的、かつ詳細にはこれからの研究結果が待たれると考えます。今回の研究に5年間というまとまった期間が認められたことは、望外のよろこびでした。研究のさらなる進展と実りある成果に結びつけられるように、初心に戻って目的達成に励みたいと考えています。